

ふじ  
藤

もり  
森

まこと  
誠

学位の種類	博士(文学)
学位記番号	文博第146号
学位授与年月日	平成15年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	東北大学大学院文学研究科(博士課程後期3年の課程) 西洋史学専攻
学位論文題目	プトレマイオス朝エジプトの官僚制の研究
論文審査委員	(主査) 教授 松本 宣郎 教授 佐藤 勝則 教授 小野 善彦 助教授 有光 秀行 教授 田中 英道

## 論文内容の要旨

### 研究状況と課題の設定：

アレクサンドロスの東征(前323年)に始まり、クレオパトラ7世の死(前30年)をもって終わるヘレニズム世界においては、その構成諸国家で、古典期のギリシアともローマ国家とも異質の独自の支配体制が形成された。

我が国の学界では、ギリシア型の民主政都市国家とも、ローマ型の世界帝国とも異なったヘレニズム君主国、殊にプトレマイオス朝エジプトについての研究はこれまで殆どなされていない。それに対し、欧米諸国では、ギリシア、ローマと並び、プトレマイオス朝は18世紀以来盛んに研究が行われているテーマであり、英米独仏のみならずイタリア・ベルギー・北欧諸国など、ほぼ全ての国で研究がなされ、各国で独自の研究スタイルもまた確立されている。ただし、国によって研究スタイルがかなり異なっており、例えば、イギリスでは経済史的観点から、仏独ではパピルス学・碑文学的観点から、ベルギーではプロソポグラフィのデータベース化を通じ、また近年のアメリカでは英米系の社会理論に基づいて、それぞれ研究がなされている。いずれにせよ、我が国の同王朝研究は欧米に比し、1世紀ほど立ち後れている。

私はかかる欧米の研究成果をもとに、これまで同王朝の官僚機構の変遷について考察を行ってきた。しかし私は、博士課程進学後、欧米の伝統的な実証主義的研究では諸官職個別の変遷過程は明らかにされて来たものの、その変遷過程を社会構造との関連で論じた研究が少ないことに気付いた。他方、特定の社会理論に基づくアメリカでの研究は、その理論に囚われ、理論

が実証に優先し、一面的・断定的な結論に陥りがちである。そこで私は、同王朝の官僚制を、支配形態をも含む、重層的な社会構造の枠組みの中で考察することを研究目的とするようになった。それにより、オリエント世界やローマ帝国などの様々な社会構造のあり方とも比較可能となり、最終的に同王朝の歴史的意義をより明確な形で提示しようという見通しを得るに至った。

プトレマイオス朝エジプトは、領域国家の経営というヘレニズム諸王朝共通の課題に直面し、その課題に官僚制の構築をもって応えたことが一般的に知られている。国家が人民の生活の隅々にまで国家的規制を加えることで収奪のシステムを整え、その行政の集権性は史上稀にみるほどの完成度に達し、前3世紀には同王朝は空前の繁栄を見たと考えられている。かかる像は、前3世紀のファイユーム出土の史料、つまりゼノン・パピルス或いは「プトレマイオス2世の収税法」から専ら導き出されたものといえよう。他方、旧来の研究史上、前2世紀以降の官僚機構は論じられることが少なく、それ故、前2世紀以降は、かかる官僚機構が機能不全を来し、結果的に同王朝の衰退がもたらされた時代と考えられて来た。

しかしこの官僚制も、その機構が前3世紀に一度に構築されそれがその後、不変であったわけではなく、300年に亘る同王朝の支配の中で様々な変遷を遂げ、新たな機構が構築された、と考えられよう。そこで私は、同王朝期に行政が、いかなる時代的情況を背景に、いかなる変遷を遂げたのかに着目する。本論文が扱うパースペクティブとしては、プトレマイオス朝エジプト全時代を通じて、コーラー（地方）行政に現れた現象を「ほぼ余すところなく」論ずるものである。

第2章「ストラテegos職—コーラー行政機構の変遷—」では、元来は軍事指揮官であったストラテegosと呼ばれる官職が時とともにその権限を伸張させ、最終的には同王朝後期の行政において、まさしく中心的な担い手となったことを明らかにする。但し「ストラテegos職」といっても、これは決して単一の官職ではない。同王朝では、多種多様な「ストラテegos職」が現れる。彼らは管轄地域・権限の点で相互に大きく異なっている。またそれぞれの発展段階も異なっている。コーラー行政に現れる「ストラテegos職」は、次の6種類が挙げられる。

1. 「下及び中エジプトのノモス・ストラテegos」、2. 「下及び中エジプトの『複数の』ノモスを管掌するストラテegos」、3. 「上エジプト（テーバイス地域）の総督としてのストラテegos」、4. 「上エジプトの『複数の』ノモスを管掌するストラテegos」、5. 「上エジプトの『単一の』ノモスを管掌するストラテegos（ないしエピスタテース）」、そして6. 「エピストラテegos」である。第2章では、その内部の節ごとに、これらの「ストラテegos職」が個別的に論じられる。これらは、管轄地域・権限・成立の背景・官職の恒常性と臨時性等の点で、相互に著しく異なっているのである。何ゆえ、かかる多様な「ストラテegos職」が同一の章で論じられるのかについては、一つの理由がある。それはこれらの官僚の性格はそれぞれ異ってはいるものの、史料の上では皆「ストラテegos」と呼ばれているのである。従ってかかる多様な「ストラテegos職」を、まずもって分類する作業が必要不可欠である。従って、最も大きな枠組みとして「ストラテegos職」という章立てを設定し、まず官職の峻別作業を行いながら、さらにその内部で個々の官職を扱うという手順を採りたい。実際、官職の峻別作業はかなり困難な作業である。例えば「ストラテegos職」研究に先鞭を付けた、Bengtson (Bengtson, H., *Die Strategie in der hellenistischen Zeit* III, (Münchener Beiträge zur Papyrusforschung

und antiken Rechtsgeschichte 36), München (1952<sup>1</sup>; 1967<sup>2</sup>.) は、コーラー行政に現れる「ストラテゴス職」を、「ノモス・ストラテゴス職」、「上エジプト（テーバイス地域）の総督としてのストラテゴス」、「エピストラテゴス」職の3つに分類している。しかし実際にはコーラー行政の「ストラテゴス職」は、上記のように6種類存在した。即ち Bengtson は異なる官職を同一のカテゴリーの中に含めてしまったのである。その結果、ある特定の「ストラテゴス職」の機能分析の段階に立ち至ったとき、彼は誤った結論を導き出してしまった。ただし、機能の異なる諸官職を同一のカテゴリーに含めているからである。よって私は、官職の分類には慎重さをもって当たり、さらに「宮廷位階」という、官職弁別のメルクマールをも援用することで、官職分類に正確さを期した。まず、官職発展のスタンダードなタイプとして、上記1を考察する。当初軍事官職であったストラテゴスが、B.C.3世紀以降、本来の軍事権は失いつつも、民政権を徐々に蚕食し、B.C.2世紀中葉にはついに財務権をも管掌するにいたり、一つのノモス（県）に一人の「ノモス・ストラテゴス」が名実共にノモスの長となって行く過程を描き出した。2はエジプトが混乱の時代であるB.C.2世紀前半にのみに現れる高位官職であり、その一番の特徴は軍事権を有していたらしいことである。3は上エジプト全体の総督職であって、常に反乱の危険をはらむ上エジプト—実際B.C.3世紀の末からB.C.2世紀前半に生じた上エジプト大反乱の時期は、プトレマイオス朝支配地域から離脱していた—を有効に統治するため、広範な民政権と強力な軍事権を行使し、反乱を未然に防いだ官職である。6はまさにこの大反乱の時期、上エジプトを奪還するために王の側近の中から任命された官職であり、臨時職ではあるが、民政そしてとりわけ軍事の面でエジプト全土で大規模な権限を揮い、彼には3上エジプト総督ですら服従するほどであった。4は上エジプトのみで例証される官職であり、管轄域が最後まで定まらない官職である。どうやら彼の任務は巡回裁判を行うことにあったようである。5は上エジプトでは「ノモス・ストラテゴス職」の発展が下及び中エジプトに比べて遅れて生じたことを裏付ける事例である。彼は本来の軍事権をなかなか失わないのである。それでも彼はB.C.1世紀の初頭、やっとスタンダード・タイプである1とほぼ同じ権限を兼ね備えることとなった。以上の諸事実とともに指摘されるべきは、B.C.3世紀には絶大な権限を有した中央の財務大臣ディオイケテースが、混乱の時期であるB.C.2世紀前半には権限を失墜させていたことである。この時期、権限を伸張させつつあった「ノモス・ストラテゴス」は、ディオイケテースに従属していないのである。それでも混乱の時期が過ぎ、B.C.2世紀中葉になると、再びディオイケテースは地位を回復し、B.C.2世紀後半になると、「ノモス・ストラテゴス」はディオイケテースの傘下に入り、「中央のディオイケテース—地方のノモス・ストラテゴス」という命令系統が出来上がり、これが同王朝後期を規定する「ノモス・ストラテゴス」体制が完成したのである。

本章で示されたのは、300年に亘るプトレマイオス朝支配期に生じた、エジプト全土での行政機構の大規模な組み替えである。明らかなのは、同王朝行政機構が全くドラスティックな変化を被ったことである。変化を被らなかった官職は一つとてなく、あらゆる官職が時代状況を背景に変化し、一つ一つの官職が変化した結果、結局B.C.3世紀の行政機構とB.C.1世紀のそれとは全く異なるものとなったことを提示する。つまり、全体としての行政システムがすっかり入れ替わったのである。わたしはこの章の考察を通じて、同王朝行政のダイナミズムを提示した。

第3章「バシリコス・グランマテウス」はノモス・レベルの事務書類を一括して行ったノモスの書記長を扱うものである。この分野の研究は欧米でも非常に立ち遅れており、近年まで長

いこと、この官職は同王朝支配期を通じて変化を全く被らなかつたと考えられてきた。しかし近年、バシリコス・グランマテウス職に関する研究が著され、それによって新たな知見がもたらされた。とりわけ重要なのは、この官職もやはりドラスティックな変化を被ったという事実である。B.C.3世紀中頃のごく僅かな期間に、この官職の権限は飛躍的に伸張し、瞬く間にノモスの事務長職へと変貌を遂げたことを提示する。他方、エジプト人が務めたこの職を、当時の人々がどのように見ていたのかを示す興味深い事例があるので、それも指摘している。

第4章「B.C.3世紀のアルシノイテス・ノモスの行政機構—行政区・徴税活動・ethnos (ἔθνος)—」は、B.C.3世紀のアルシノイテス・ノモス（ファイユーム）における行政機構がいかなる形態をとっていたのかを明らかにするものである。この問題は、同王朝行政を巡る諸問題の中で、最も困難な問題の一つとされてきた。とりわけ、ノマルキアとトパルキアという2つの行政単位がいかなる関係にあったのかという問題に関しては、これまで研究者の間に統一的な見解というものは全く存在しなかつた。ところが、1990年代以降、この分野でも優れた研究が幾つか著され、旧来想定だにされていなかった新事実が次々と明らかにされた。かかる研究分野は、近年の同王朝研究において最も実りが多かった分野であり、また今後も一層急速な研究の進展が見込まれる分野である。その成果を受けて、第4章では、2つの行政単位即ちノマルキアとトパルキアとの関係性の如何という問題に一定の解決を提示するのみならず、さらに進んで、アルシノイテス・ノモス内部にあった諸々の行政区（上から、ノモス・メリス・トパルキア・徴税区・村落）のあり方を明らかにし、実際の徴税活動の分野でこれらの行政区がどのように機能していたのかについても論ずる。徴税を行うに当たり、何よりもまずその前提として、住民データの収集と登記が必要とされたわけであるが、集められたデータは各行政レベルでどのように集約され、またどのような形でさらに上位の行政レベルに伝達されたのか。この点についても論じている。同王朝には ethnos と呼ばれる一種の「職業身分」が存在し、これが実際の徴税活動の場面で大きな役割を担っていたこと、行政区の編成のあり方にはかかる ethnos も大いに関係していたことを提示する。なおこの点に関しては、近年、関係史料の新たな発見が相次ぎ、史料状況の上でも今後大いに期待出来る研究分野である。

第5章「村書記 Menches のネットワーク—B.C.120-110年の Kerkeosiris 村—」は、B.C.120-110年にアルシノイテス・ノモスの Kerkeosiris 村で村書記をつとめた Menches という人物を論ずる。彼が村書記の立場で作成した書類は、今日所謂「Menches 文書群」として現存する。この史料は、Kerkeosiris 村における土地利用状況や土地の諸々の名目、さらにはそれぞれの名目の土地の面積など、詳細な情報を豊富に含んでおり、Kerkeosiris 村というマイクロ・コスモスを余すところなく描き出すことを我々に可能ならしめる、貴重な史料としてこれまで研究者によって活用されてきた。しかしこの史料群にも厄介な問題が存在する。それは、この史料群に含まれる諸テキスト間の相互関連が判らないために Menches がどこで活動しているのか判らないという問題である。しかし近年この分野でも優れた研究が著され、彼の人的ネットワークが極めて豊かなものであったことが明らかとなった。彼は自分の上司と緊密な関係を取り結び、同僚達と集団で土地調査とその帳簿作成に当たり、年に一度、アレクサンドリアへ出張し、そこで国家最高の官職ディオイケテース（この時期には以前の権力を取り戻していた）と面会し、直接指示を仰ぐことすら出来たことが明らかとなった。末端行政の村書記と国家最高財務大臣との関係性はこれまで想像だにされたことはなく、全く新たな知見として、同王朝官僚制の新たな側面を提示する事例であろう。

## 結論：

以上は同王朝行政システムの変遷の全ての像である。第2章と第3章はノモス・レベル以上の官職のあり方を扱い、第4章と第5章はノモス内部の行政の問題を扱っている。これにより、プトレマイオス朝エジプトの全時代を通じて、コーラー（地方）行政に現れた現象を「ほぼ余すところなく」論じようという当初の目標は一応達成されたといえるであろう。あらゆる官職がドラスティックな変化を被ったという事実は、欧米においても散見される、B.C.3世紀の行政形態を完成型と見る風潮に対しアンチテーゼを投げかけるとともに、同王朝を巡る新たな歴史的评价への手掛かりとなるであろう。

## 論文審査結果の要旨

ヘレニズム時代のエジプトは、マケドニア人のプトレマイオス王朝の下、先行したファラオ時代の支配を受け継ぎつつ、独特の行政システムを作り上げ、繁栄を続けた。本論文は同王朝の支配構造の重要な支えとなった官僚制という、我が国では未踏の分野の解明にギリシア語パピルス文書を駆使して取り組んだものであり、その研究成果は多くの創見を含んでいる。

第1章「序論」において論者は、欧米のプトレマイオス王朝官僚機構の研究は歴史的な変遷過程を実証的に社会構造との関連で考察する面で不十分であることを指摘し、有力資料のみに依拠しがちであった先行研究を批判し、前3世紀から1世紀までの同王朝の支配構造の変遷を跡付け、同王朝の独特の官僚制形成の歴史を明らかにすることによってオリエント世界やローマ帝国の支配構造との比較研究にもつなげたいとする、本論文の視座を主張する。

第2章「ストラテゴス職－コーラー行政機構の変遷－」は、元来は軍事指揮官であったストラテゴスと呼ばれる官職が、時とともにその権限を伸長させ、各地の村落・田園の行政の中心的担い手となったことを明らかにする。論者はストラテゴスの名の付く職が各時代にわたり6種あることを指摘し、広大なエジプトの各地域の相違、前3世紀から1世紀までの時代に生じた反乱などの出来事などからこの職の多様性を歴史のダイナミズムの中に位置づけて論じ、前2世紀の「エピストラテゴス」が臨時的な強い権力の職であったことを論証し、前1世紀に中央のディオイケテースなる高位行政職のもとにノモス・ストラテゴスが配置されるに至ることを明らかにしている。ここでは、同王朝の官職の名誉称号に関する Mooren の研究が活用され、Mooren の意図を越えて、これら称号の変化を追うことでストラテゴス職の歴史の変遷の論拠を見いだしている。

第3章「バシリコス・グランマテウス職」は、ノモスと呼ぶ行政区域の事務的文書処理を行った書記官について、同じく多数のパピルス文書を用いて詳細に検討する。同職は従来の研究ではプトレマイオス王朝全般を通じて全く変化を被らなかったと考えられてきたが、論者は最新の研究に依拠しつつ、同職は前3世紀には測量担当の低い地位にあったが、同世紀のうちにノモスの事務統括官職へと昇格し、徴税請負にも関わるに至ったことを論証している。

第4章「B.C.3世紀のアルシノイテス・ノモスの行政機構－行政区・徴税活動・ethnos－」はナイル中流のアルシノイテス・ノモスの行政機構を明らかにしている。ここでも論者はノモスの行政区が、前230年までは領域が限定されない「ノマルキア」と称されるものだったが、以後は「トパルキア」と呼ぶ、領域が明確なものとなり、村落民の詳細な財産データを集めて徴

税の利便とさせたことを膨大なパピルス文書を逐一邦訳した上で論証している。さらに230年以後の同ノモスの行政区については下から村落・トパルキアに加えて、その上に「メリス」と呼ばれる小行政区の存したことが知られるが、その内実が不詳であったのに対して、これが徴税とは関係しない、警察機構に関わるものではないかと推測しており、その論は説得力がある。また、職業や民族を単位とする *ethnos* と呼ぶ住民グループの存在を紹介し、このうちの上層民が徴税等の実務を託されたことをも実証している。

第5章「村書記 Menches のネットワークーB.C.120-110年の Kerkeosiris 村ー」は、アルシノイテス・ノモスの村の書記を務めた Menches なる人物ののこした多量の公私にわたる文書を検討し、主として Verhoogt の研究によりつつ、当該文書群の公私の記述の区別を行い、村の書記役の職掌を明らかにするとともに、彼が直上の上司と目されるトポグランマテウスを飛び越えて、王朝の首府アレクサンドリアの高官ディオイケテースと定期的に面会していたという興味深い事実を明らかにする。またディオイケテースの子であったと思われる Dorion 某とこの Menches との人的関係をも推測して、村の富裕者が役職を持ち、中央の有力者と関係をもって地域の顔役として振る舞った可能性を示唆し、ローマ社会とも比較しうる事例を摘出している。

第6章「結論」において論者は、先にふれられた Mooren の提起した、官職の名誉称号の創設について再説し、これが前197年頃であるところから、王朝の行政システムがこの時点から大きな転換を遂げたことを推測し、そのことと先のストラテゴス職等の変遷との関連を示唆する。その上で論者はプトレマイオス王朝の官僚制、ひいては行政機構が反乱などの政治状況や地域的偏差の影響もあって、まさに中央権力の側から、時にドラスティックに変化し、前1世紀に至って中央のイニシアティブが強く貫徹される状況となった、と述べる。この点はなお推測にとどまるとは言え説得力がある。

以上のように本論文は、プトレマイオス王朝エジプトの支配構造を、官僚制に関する重要ないくつかの事象を掘り下げて、欧米の最新の研究に依拠しつつも独自の見解を加えて、とりわけ前3世紀から前1世紀にいたる時代的スパンの中に位置づけつつ論じている。「ストラテゴス職」についても「バシレウス・グランマテウス職」についても、これを歴史的な変遷の位相で跡付け、同王朝の社会構造とも意図的に結びつけている点に独創性が見いだされる。本論文によって、同王朝の「コーラー」、換言するなら、その地方行政が、ファラオ時代の体制からギリシア的なそれと重なり、融合しつつ独特のものへと形成されていった状況が明らかにされたことは間違いない。

論者は上述のごとく同王朝の支配構造を、社会構造と関連させつつ解明することを目指しているが、本論文に見る成果はすでに、この後のローマ帝国の支配構造と社会、また中世ヨーロッパの国家、あるいはオリエント、アジアのそれらとも比較検討しうるものと言えよう。膨大なパピルス文書の活用と欧米の最新の、これまた多量の研究文献の渉猟にも行き届き、上述の諸点のほか、エジプトのノモスの人的規模から中央の政策を推測する点、あるいはエピストラテゴスの所管轄などにつき、いくつかの創見をも提出している。従って本論文が古代オリエント・ギリシア・ローマの歴史研究上その発展に寄与するところは少なくない。

以上により本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。